

ていただいた平山さんを失った私には、云いあらわす言葉もなく、ただただ痛惜の涙にむせぶばかりです。あまりにも大きな懐に抱かれていたので、平山さんの偉さとか、大きさを、外からながめて評することの出来ない私です。あたかも富士山の麓に立って、秀峰の全貌を見得ないようなものです。又平山さんの葬儀をお手伝したばかりの今日、まだ悲しみのいえぬ私には、平山さんの思い出を語るには、あまりにも生々しい悲事で、その気力も出ません。併し学会の御命令により、筆をはげまして寄稿する次第です。

平山さんは、常に青年のような若々しい理想或は夢を抱いておられました。反面、厳しい現実にはどこまでも公正な判断をもって、立向っておられました。そしてこの理想と現実の結びつき、或は両者の実際的な調和に、絶えず積極的な関心をもち、妥協することなく努力を続けてこられました。これが平山さんの無限の活動力の泉となり、又平山さんの生甲斐であったとも考えられます。

敗戦後の日本の建設技術界の発展には、欧米の先進技術国にみられるようなコンサルタンツシステムの必要を痛感されて、有志とはかられ技術士制度の確立を提唱されると同時に、自ら実際に技術士業務を創業されました。平山さんをリーダーとするパシフィックコンサルタンツ会社も、亦日本技術士会も、共に昨秋 10 周年の記念の式典を挙げる運びとなり、いづれも基礎が固まって来たのです。技術士制度に対する平山さんの燃えるような理想があったればこそ、又実際に技術士業を自ら行なって、厳しい現実の世情を知られたればこそ、両者の具体的な結びつけに、一層の真実性をもって努力されたのであります。この平山さんの努力は、まことに超人的なもので、感嘆するばかりです。微塵も、個人的或は徒党的の利慾などのある訳はなく、ただただ日本の建設技術界の発展を念願された活動でした。

これと同じことが、平山さんのプレストレストコンクリート技術の確立発展に対する活躍についても、云え

フィリピン マニラ鉄道カガガン延長計画現地踏査
(1959年6月)



ます。PCは日本にとって初めての技術であり、又始めての工業であった当時、平山さんは自らその創業の苦勞を担って、パイオニアの努力を惜まれなかったのがあります。PC工業界も、今年で 10 年の歴史を持つものとなり、日々隆盛の景況にあります。平山さんの今日までの努力の賜物であります。

平山さんが、病篤くなられた 12 月のある日、私共の会社の図書室から、技術書を病床にとり寄せられたことを知り、私は思わず平山さんに療養専一を諫言しましたところ、子供が母親に甘えるような風情で、『何も勉強なんかしないヨ』『ただ見たかっただけだヨ』と云われました。私は、平山さんが死病の床の中にまで、技術を離れない心意気を知り、ただただ泣けました。

平山さんは、ほんとうに技術の苦勞人と申すか、技術と共に生涯を過された人です。私共に、いつも口癖のように云われたことは、次の時代を背負う若い技術者の育成のことでした。『若い人達を大切にやれヨ』『若い者の云うことをよく聴いてやれヨ』平山さん程、若い者と語り、共に生きることに喜びを持たれた人を知りません。平山さんが、いつも青年のように若々しい感情と気魄と実行力を持ち続けておられたのも、このせいでしょう。この要素は、技術者に最も大切なものですが、平山さんはいつまでも若々しい技術者でした。思いやりが深く、何時でも、どんなことでも、誰にでも、真面目に考え相談にのって下さった平山さん。この平山さんを失ったことは、土木技術界にとって、この上もなく残念なことであり、又かぎりない淋しさに、耐えられない思いがします。心より哀悼の意を表します。 1962. 1. 30・記

(筆者：正員 パシフィックコンサルタンツKK常務取締役技師長)

平山さんの思い出

河北正治

私は平山さんに直接師事したことはありませんが、私のなき父を通して今日まで土木技術者としての生き方を間接には教え込まれてきたような気がしてなりません。私の父が復興局に勤めておりました当時、私はまだ中学生でしたが、復興局に二世の方がおられ、父はその方に英会話を教しえて貰うように段取りしてくれました関係で学校の帰りにしょつ中復興局に寄ったものです。そんな関係で家でもいろいろ復興局におられる方々のお話がよく出たものです。その中で常に話題に上っていた方々は太田円三さん、平山復二郎さん、成瀬勝武さん、正子重三さんなどだったように憶えております。父は農業土木から復興局に転じた関係もあったのでしょうか、若い

土木技術者の方々の活躍には特に関心が深かったようで、平山さんのことは特によく話してくれました。平山さんは一高、帝大を通じて野球選手として勇名をとどろかせ、成績も常に優秀であり、仕事振りが常に積極的で、特に傑出した30才過ぎの若い道路課長であられたようです。この若い江戸っ子の課長を頼もしく感じ、自分の子にも平山さんのように成人して貰いたいものと思っただけでなく、平山さんの話を聞いて呉れたのではないかと思われます。私が平山さんと同じ土木の道を歩むようになったのも全く平山さんに魅せられた父の指図によるものであります。即ち大学の何を選ぶかも、勿論父は平山さんに相談して居ったようです。大学中の実習も私は父の段取りで鉄道に行きました。勿論父は平山さんにお願しておったようです。大学を出るに当たってどの方面に私を進めさせるかも父は平山さんと度々お会いして研究していたようです。その当時既に平山さんは復興局における任務を終えられ、鉄道に帰っておられました。父は平山さんの跡を私に歩かせたかったようですが、平山さんは内務省に奉職するように父にすすめられて、私の進むべき方向が決められたように思います。

こうして私は内務省につとめるようになり、又年代も違うので平山さんにお目にかかることもなく過ぎて来ましたが、終戦後、移住民引揚げ団長として多くの人の引揚げに懸命の努力を払われ、皆に親しまれておられたうわさもよく聞いておりました。その後は数社の社長、相談役、顧問等をなさり、その上に学会、協会等の会長又は役員を兼ね、誠に精力的な活動を続けておられました。私もこの時分から時々お目にかかるようになりまし

たが、よくもお体の続くものだといつも感心しておりました。そのみならず著書まで出版せられ、それもよくある糊と鉄のものではなく、よくもデータを集められたものだとただただ感嘆しておった次第です。

このように平山さんは官僚としての優秀な技術者であったばかりでなく実業界でも財界はえぬきの腕きき以上の活躍をして評判も良かった方で、73年の生涯を平山さん程フルにつかった方は珍しい事と思います。

又平山さんは人の思惑、自分の立場等を考えずに意見はズバリ、ズバリとおっしゃっておられました。その発言には十分な裏付けがあり誠に頭脳の緻密な方であられました。その為でもありましようが、平山さん程思うことを率直に言って聞く者に反感を与えずして一生を過ごされた方も少ないと思います。

私は平山さんを失ったことは土木技術界にとって大きな損失であると思うことは、土木技術の立場を他の立場の人に説明し、納得させることは非常に難しいことですが、平山さんは土木技術を説得するのに実に妙を得ておられたことを思うからでもあります。

父は生前太田円三さんがなくなられた時大変悲しんでおりました。今この活動家を失う悲しみは父のそれにも比すべきものでしょう。しかし平山さんは70余年の生涯を土木技術者として十二分の責を果して私達を残して他界されました。やる気があればやれるものということ、逆に言えばできないのはやる気がないからだということ身を以てお示し下さった平山さんの御冥福を心から祈る気持で一杯です。

(筆者：建設省道路局長)

書 評

鉄 道 工 学

小林 勇
伊藤 富雄 共著 丸善刊
後藤 尚雄

京都大学工学部で長年にわたって鉄道工学を担当した小林 勇教授が昭和 35 年 7 月に他界された。後継者の点では心を残されなかったにしろ、せっかく整理された講義ノートが日の目を見ずじまいになるのは何とも後髪を引かれる 思いをされたことと推察する。

そのぼう大なノートをもとにし教えずであり、かつ後継者である伊藤富雄、後藤尚男の両氏が整理し、必要な加除を行なってできたのが本書である。それゆえ数ある鉄道工学の教科書のうち最も新しい技術を網羅したものである。

内容は、総論、鉄道線路、軌道、分岐装置、線路の付属物と防護設備、車両および運転、停車場、保安装置、特殊鉄道の9章より成っており、いわゆる鉄道工学全般にわたり、明確にしかも理解しやすく記述してあるのは、いかにも直接教育担当者の著書にふさわしい。軌道の設計合理化の一環として世界的に登場したロングレールなどももちろん取上げられ、その理論的裏づけについても一般の鉄道技術者として知得しておくべき程度の説明が述べられている。そして従来の鉄道工学の著書が国

有鉄道の資料のみをもととして書かれていたのに対し、本書では関西を中心とする民間鉄道の設計資料もある程度もり込まれているが、その点も異色といえよう。

枚数制限でやむを得なかったかとは思うが、いいうならば、体系としての鉄道工学の将来を形づくる意味で、社会的技術的観点からの鉄道輸送の問題にも、また勾配改良、線路増設などを主眼とする線路選定の問題にもくわしく筆を伸ばして欲しい。

いづれにしても一般技術者としての参考書として、また学生の教科書としてひ益する所が少なくないことを確信する。

著者：故小林・工博 京都大学教授、伊藤・工博 大阪大学助教授、後藤・工博 京都大学教授

体裁：A 5判 318 ページ、定価：1100 円、昭 37.1.20 発行

丸善：東京都中央区日本橋通 2 の 6

【東京大学 八十島・記】